

論文の内容の要旨

論文題目「日本語母語話者とアラビア語母語話者（サウジアラビア人）の母語
場面及び日本語接触場面における依頼会話
—金銭及び時間の依頼会話における参加者の規範の分析—」

学位申請者 ALDULAIMI YAZED

キーワード： 依頼会話 母語場面 接触場面 規範 言語管理理論

これまで地理的な理由もあり、日本人とサウジアラビア人の国家間・国民間の交流はほとんどなかった。しかし、近年日本に留学するサウジアラビア人も増え、アラビア語学習を希望する日本人も多く見られるようになってきた。また、2005年にアブドラ国王奨学金制度が始まり、多くの国費留学生在が日本で勉強するようにもなった。

両国民間の交流機会が増えると、文化や価値観などの違いによる誤解や摩擦が生起する可能性が高まる。本研究は両国の交流の増加に伴う、日本人とサウジアラビア人のコミュニケーション問題とその原因の分析を目的とするものである。特に本稿では依頼会話の際に生じるコミュニケーション問題に焦点を当てている。分析にあたっては、会話の参加者がどのようなインタラクティブ規範を持って発話をするのかを言語管理理論などの理論的枠組みを用いて分析をおこなっていく。

本研究で取り上げる依頼場面は、日本人とサウジアラビア人の大学生の親友同士（20代・男性）を対象とするもので、大学生の日常生活で比較的頻繁に使用される「金銭の貸借」と「時間提供」の場面を取り上げた。更に、それぞれの場面では、金額や時間の長さを調整することによって、大きい負担を伴う場面（10,000円／300リヤル・30分）と小さい負担を伴う場面（500円／15リヤル・5分）の2種類を場面設定でデータ収集をおこなった。

金銭及び時間を選んだ理由は、両場面とも負担の度合いを数値で表すことができるためである。また、負担度を2種類に設定した理由に関しては、被調査者が負担度の違いにより、依頼の仕方と受入れかたの発話がどのように変容するのかを確認したいためである。

なお、データ収集にはアンケート調査、談話完成法テスト（DCT）、ロールプレイの三つの方法を採用した。

まず、最初の考察にあたる第4章では、日本語及びアラビア語母語場面における依頼会話に焦点を当て、依頼者と被依頼者の二つの立場で、どの設定

でもっとも負担を感じるのかアンケート調査（日本人 107 人、サウジアラビア人 110 人）をおこなった。その結果、日本人にもサウジアラビア人にも「金銭貸借依頼否定規範」「金銭貸借依頼肯定規範」「時間提供依頼否定規範」「時間提供依頼肯定規範」が存在することが分り、それぞれの国によって規範の強さが異なることが分かった。例えば、日本は全体的に金銭に関しても時間提供に関しても、依頼者、被依頼者の立場の両方で否定的な規範が強く顕在化するが、サウジアラビア人は基本的にどちらの立場でも肯定的規範が強く顕在化し、大きな問題なく依頼と受入れが進む傾向があった。ただし、サウジアラビア人も大きな金額（300 リヤル）を依頼する立場になると、依頼に躊躇する意識が現れることが分かった。

次の第 5 章では談話完成テスト（DCT）（日本人 47 人、サウジアラビア人 53 人）を使用し、日本語及びアラビア語母語場面における依頼会話を分析した。DCT は設定された依頼の場面で、自分だったらどのように回答するかを空欄に記入してもらう方法であり、アンケートより深い意識を探ることができる。

その結果、4 章に挙げた 4 つの規範の下位規範にあたるいくつかの規範群が見つかった。日本人被調査者には「貸借動詞使用規範」、「返却約束規範」、「依頼謝罪規範」、「理由説明規範」、「容易さ強調規範」、「相手配慮規範」、「報酬約束規範」、「依頼謝罪規範」サウジアラビア人被調査者には「貸借動詞使用規範」、「返却約束規範」、「理由説明規範」「相手配慮規範」「依頼説明規範」「容易さ強調規範」「相手配慮規範」などが見いだされた。

ただし、これらの規範意識はどの場面においても一様に顕在化していたわけではない。例えば、依頼において日本人よりも肯定的に捉え、謝罪するという規範意識に結びつかない傾向のあるサウジアラビア人は、5 分程度のアンケートの依頼では、簡単であることを強調する「容易さ強調規範」が顕在化するが、30 分のアンケートを依頼する場合は相手の都合を聞くなど「相手配慮規範」を顕在化させていた。日本人は同様の場面では、より相手の気持ちを慮って「報酬約束規範」「依頼謝罪規範」を顕在化させていた。

第 6 章では日・サ接触場面に焦点を当て、ロールプレイ会話（7 ペア）とフォローアップインタビューによりデータ収集をおこなった。ロールプレイは現実の場面により近くなり、具体的に接触場面ではどのように意識が管理されているかが明白になる。また、母語場面の規範意識が接触場面ではどのように変容しているかも知ることができる。

分析の結果、日本人の場合、母語場面で使われる規範は、サウジアラビア人が会話相手となる日本語接触場面でもそのまま顕在化していることが多いのに対して、非母語話者であるサウジアラビア人には規範の変容が見られ

た。例えばサウジアラビア人は「金銭貸借依頼肯定規範」を母語場面では強く顕在化し、金銭の貸し借りに肯定的な意識があるが、日本語接触場面ではその意識化の程度が弱くなる。また、小さな額の金銭を貸した場合、返却は不要だとする「少額返却不要規範」は母語場面では強く顕在化しているが、日本語接触場面では意識化の程度が弱くなる。これらはいずれもサウジアラビア人が日本人の規範に合わせようとしているためだと思われる。

特に日本人とサウジアラビア人の間で違いが見られたのは、金銭貸借についてであった。インタビューの結果から、日本人は子供の頃から金銭貸借はしないほうがいいという教育を受けており、親友との関係を保持するために金銭貸借を避け、否定的に捉えていることが分かった。一方、サウジアラビア人は金銭貸借をすることにより、信頼感が生まれ、親友との関係がより強まるという考え方を持っており、金銭貸借を肯定的に捉えていることが分かった。また、時間に関わる依頼に関して、被調査者は被依頼者に置かれた場合、依頼を断らないが、日本人と比較して、サウジアラビア人のほうが「消極的な承諾」をする傾向が観察された。

最終章では、本研究で明らかになった結果をサウジアラビア人日本語学習者の教育への応用の必要性について述べた。今後、日本人とサウジアラビア人が参加者となる接触場面が増加するものと思われ、誤解や摩擦のない、よにより円滑なコミュニケーションを目指すために、日・サ接触場面の研究を続けていきたい。

以上 (2760 字)